

井戸端だより

第 92 号

発行日： 2015.12.22

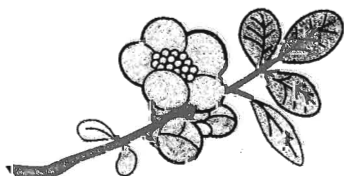
発行： 暮らしの学習会

今年も早1年が過ぎ、あと残りわずかとなりましたが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

世界中を震撼させたISによるテロ事件が花の都パリで起きてしまいました。129名もの尊い命が奪われたことに憤りを感じずにはいられません。そのあとの報復空爆……報復の連鎖の始まりになるのでしょうか。いかに平和を守ることが難しいかを感じずにはいられません。報復は報復を生みます。他の道はないのでしょうか。

さて、第92号会報をお届けします。ご一読いただき、何かを感じていただければ幸いです。どうぞ皆様良いお年をお迎えください。

目次



- | | |
|-----------------|-----------|
| ・ 10・11・12月例会報告 | ……P.2～7 |
| ・ ファミリーヒストリー | ……P.8～9 |
| ・ 天空のオリオン | ……P.9 |
| ・ 一琳派・名品との出会い | ……P.10～12 |
| ・ 今年の日常生活 | ……P.12～13 |
| ・ 京都の文房具屋さん | ……P.14～15 |
| ・ 短歌十首 | ……P.15 |
| ・ 同窓会あれこれ | ……P.16～21 |
| ・ きっと輝く未来があるから | ……P.22～23 |
| ・ 二度の披露宴 | ……P.24～27 |
| ・ 雑感 | ……P.28～31 |
| ・ お知らせ・編集後記 | ……P.32 |

10月例会報告

10月27日(火) 活動会員5名は、午前9時、中央公民館を出発し、開催中の「空と海－内海清美展」と特別展「四国遍路と巡礼」を見るため、西予市宇和町の愛媛県歴史文化博物館を訪れた。川内ICから西予宇和ICまで約1時間、現地到着。私にとっては随分以前(高速道も無かった頃)の遠い記憶しかなく立派な外観に驚き、建物内へ。

観覧料(65歳以上の人は年齢の分かるものを提示すれば半額に驚き!)を支払い、まずは和紙彫塑による「弘法大師空海」の世界「空と海－内海清美展」の常設展示室へ。※この作品は弘法大師空海の多彩な生涯を、和紙彫塑によって19の舞台上で表現して見せるもので、日本古来の伝統的な素材である和紙の特性を生かし、3年がかりで作成された大作。今回は全19場面のうち、弘法大師空海が入唐帰朝後、宗教・教育・土木など様々な分野で活躍する壮年期から晩年期までを表現した10場面を展示。

第十章 即身成仏

第十一章 最澄－出会いと決別

第十二章 怨霊降伏・御修法・薬子の変

第十三章 高野山金剛峯寺建立

第十四章 満濃池の修復

第十五章 和と漢

第十六章 三筆鼎談

第十七章 東寺の密教活動と庶民教育

第十八章 秘密曼陀羅十住心論

第十九章 兜率天へ

内海清美氏の作品は、ステージに多数の人形を配置し、音響や最新LED照明を使用することで魅力的な総合芸術としての展示空間を演出。使われている和紙は四国産で、人形の顔は高知県雁皮紙・衣装の大半は愛媛県内子町の楮紙(大洲和紙)・僧侶の袈裟は四国中央市の塵入り工芸紙・背景の和紙タイルは徳島県の阿波和紙が使用されている。(空と海－内海清美展パンフレットより抜粋)※

人形一体一体のそれぞれの顔・道具・指先の隅々まで繊細に作られ、今にも動き出しそう和紙人形の高い芸術性の世界に魅了される空間であった。

※その後、2階常設展示(歴史展示)へ。原始・古代から近・現代までの愛媛の歩みを一般庶民の生活を中心に、それぞれの時代を象徴する建物を実物大で復元するなどして分かりやすく紹介。1階常設展示(民族展示)愛媛の

祭りや芸能や海・山・里における人々のくらしぶり、四国遍路の変容を最新の映像機器なども取り入れ紹介。（愛媛県歴史文化博物館パンフレット）※「れきはく遍路スタンプラリー」を楽しみながら展示物を順路に沿って進んで行くが、予定の時間も考え後半はスピードアップを余儀なくされた。ゆっくり時間を掛けて見るには何度も足を運ばないと無理な資料の多さだった。最後に、特別展「四国遍路と巡礼」へ。日本の巡礼における四国遍路の特質について考える機会として、四国遍路の歴史文化について理解を深める様々な文化財が展示されている。かなり専門的な展示物が多く、じっくり見る時間が必要な特別展であった。2時間程度の滞在時間をすごし、博物館を後にした。

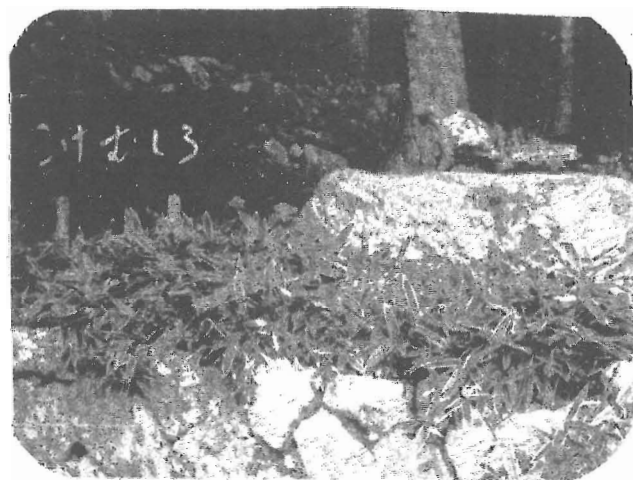
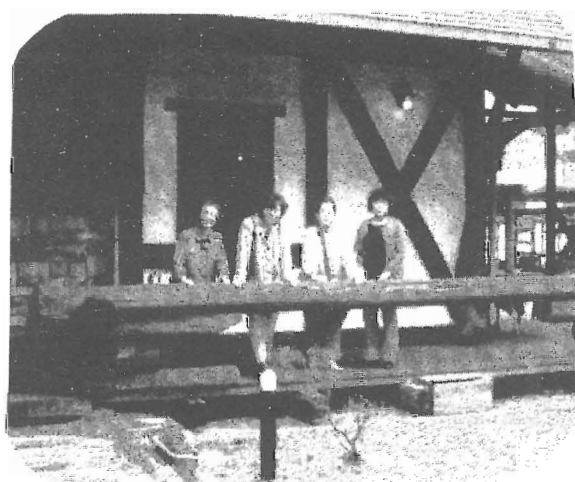
後日（2015/12/4 愛媛新聞）2016年4月開館10年を迎える「坊っちゃん劇場」で名誉館長のジェームス三木さん脚本・演出を手掛ける第10作ミュージカル『お遍路さんどうぞ』の制作発表が行われた。四国遍路をモチーフにした現代劇、2016年1月23日から約一年上演する予定で、9月には香川、高知、徳島で巡回公演も行われるそうだ。期待して待つことにしよう。

昼食は、誰もが安心して美味しく食べられるということを追及し、大切に育てた牛（はなが牛）や豚たちを丁寧に加工し販売もしている店舗も併設されている、どっしりとしたログハウスレストラン「ゆうぼく民」へ。お肉中心のメニューで、全員ビーフシチューオムライスランチ（サラダ・スープ付）を注文。熱々のオムライスはボリュームたっぷりでおなか一杯。その後、併設の燻製工房で、それぞれお買い物タイム。

その後移動すること約10分、最後の目的地「こけむしろ」へ。山手に向かって進むと手作り風の看板。ここから既に苔がびっしり生えた山肌が出迎えてくれている。丹念に育てられた苔の庭をゆっくり散策している人々もいて、管理された木々と苔との空間の清々しい空気に思わず深呼吸。まさしく「苔のむしろ」石造りの置物や石像が置かれているのだが、すでに苔に覆われ形状が良く分からない状態の物もあり、今見えている物もいずれは苔に覆われ景色が変わってしまうのだろう。暫く散策をし、木造の喫茶コーナーへ。

苔の景色を眺めながらの外のテーブルもあったが、写真展をしている室内でお茶を頂くことに。こちらでのギャラリーイベント（絵画・陶芸作品・手仕事作品などの展示）の新聞情報を見ていて、以前から訪れてみたい場所に来ることができ感激。昼食をたっぷり食べていたので素朴なお菓子（こけまんじゅう・南予銘菓唐まん）はあきらめ、こちらで食後のコーヒーを注文。一人一人にカップ2杯分はたっぷりあろうコーヒーが入った砥部焼きのポットとカップがトレーにのせられて運ばれてきた。良心的な価格とサービスにも感激。次回の例会予定を決め、暫くのんびりし「こけむしろ」を後に。大洲ICが東温市への帰路に就いた。Hさん、長時間の運転お疲れ様でした。

(A. Ⅲ)



11月例会報告

11月10日（火）活動会員4名は中央公民館を10時に出発をし「佐古ダム」（河川 重信川水系 佐川川）湖畔の散策に出かけた。私にとっては初めての場所。さて、どのような所だろう？下林方面へ車を走らせるが場所が良くわからず、上流から降りてきたトラックの運転手さんに尋ねると、ずいぶん上がって来ていて、道筋も違っていると教えられた。方向転換をし下って行くと「佐古ダム」への道筋に入る曲がり角の所で先程のトラックが待っていてくれた。有り難い配慮に感謝である。川を渡り上流へ進むと、コンクリートの壁が見えてきた（帰宅後井戸端便りファイルを見てみると、30号に愛媛新聞記事が掲載されていた。そこには、「新しいダムが重信町にできました。ものすごい存在感です。私たち人間は、いったいいくつの鎮魂歌を、他の生きものたちのために歌ったらいいのでしょうか。（T.S）」と書かれていた）ダムを左手に上がりダム湖の見渡せる場所に駐車。湖畔を一周しても1時間程の道程と聞き安心して出発。ダムを渡った対岸には「佐古の恵水」と書かれた竣工碑が。

※竣工碑の裏面の記載によると、佐古ダムは、農林水産省の国営道前道後平野農業水利事業の水源施設として建設されたものであり、平成13年度に完成した。もともとこの場所には、約150年前に築造された「佐古谷池」があり、重信町下林・上村地域の農地を潤してきた。佐古ダムは、佐古谷池の堰堤を撤去して建設されたものであり、旧池の使命を引き継ぎながら、道後平野地域全体の農地を潤す水源として新しく生まれ変わったものである。佐古谷池受益者や地元住民をはじめ、多くの方々の協力を得てここに佐古ダムは完成した。佐古の恵みの水により、道後平野地域の農業がさらに発展することを願う。平成15年3月 建立※（佐古ダム 道前道後用水 愛媛県東温市より）

整備された散策道は、落ち葉が降り積もり、しっかり踏み締めながら回りの木々を眺め、しっとりとした清々しい空気が気持ちよい。しばらく進むと、女性の二人連れに出会った。挨拶をし通り過ぎたのだが熱心にメモを取る人が気にかかった。Hさんに「水の会のTさんの様な気がする」と伝え二人で

少し近付いてみた。話し声でTさんだと確信した。側に行き挨拶をし、近況について少し話しをした。水の会は2015年3月で閉じ、自分の楽しみとして気心の知れた友人と自然を楽しんでいるようだ。しかしながら、しっかりメモを取りながらの散策をするあたりは、さすが信念を持って長く活動し続けてきたTさんらしいと感じた。嬉しい偶然の出会いとなった。Tさん達とお別れをし、メンバーとの散策をつづけた。紅葉はまだまだだったが、所々に色付いた紅葉の前や静かな湖面をバックに記念写真をパチリ。ほぼ1時間、うっすらと良い汗をかく程度の散策となった。メンバーの一人とはここでお別れをし、昼食を予定していた場所へ移動。

皿ヶ嶺登山の拠点の一つである風穴（夏にはヒマラヤの青いケシの咲く場所）へ行く途中の道路沿いにある、この10月にオープンしたばかりのログハウス風の民家カフェへ。オーナー夫妻と近所に住まわれている姉妹の方々が協力をし、家庭的な料理のランチメニューと手作りケーキを提供している。まきストーブのある店内は落ち着きのあるスペース。すぐそばの自家農園で育った野菜がたっぷり使われた食事に大満足。食後のコーヒーは好みのカップを選ばせてくる。

店内にはオーナー夫妻がお気に入りですべて収集された永井吐無氏（新居浜市出身）の絵画が飾られている。スペインを中心に欧州各地にて取材制作されていると聞く。ご本人もここを訪れ飾り付けされているとのこと。水彩画と見間違えそうな油絵は木の壁面にマッチし落ち着いた空気を醸し出している。画集など自由に見ることもでき「四国霊場八十八カ寺」のご朱印帳も制作されていて、札所で購入もできるそうだ。

すっかりのんびりさせてもらい外へ。天気がよければ真っ正面に皿ヶ嶺の雄大な姿を見せるのだが天気に恵まれなかったのが残念だった。が、毎日眺めていると様々な顔を見せてくれる権で、又、ここへ来る楽しみの一つとなった。

帰り道、病気のため暫くお会いしていなかったSa.さんの自宅を突然ではあったが尋ねてみた。元気な顔を見ることができ10分程立ち話をし、近くの

場所ならば例会参加できるまで回復されていた。その話を聞き、12月の例会は忘年会を予定していたので、皆のお気に入りの食事処『彩』を予約するため直接出向くことに。店主ご夫妻は前日迄ヨーロッパ旅行に出かけられていたそうで予約の電話がかなり入っていたが、12/8で予約することができた。久しぶりのメンバーにもお目にかかれそうな賑やかな忘年会となりそうである。

(A. M)



12月例会

12月例会は、忘年会ということで、12月8日(火)お昼12時から、東温市内の自宅でお食事処をしている‘彩’で、久しぶりにMさん、Sa・Kさんも参加して下さったの盛会になりました。K・Kさんがご主人のお怪我で出られなくなったのは残念でしたが、Oさんから送られてきた綾町四枝城攻め踊りのDVD、お祭りの日の料理レシピをこの日のために届けて下さっていたので、皆さんに回覧しました。DVDはお宅で見られるように、回すことにしました。それぞれの近況報告をしたり、健康について話したり、私事では息子の結婚披露宴の写真を見ていただいたりと、楽しい時間を過ごすことができました。今月発行予定の会報の原稿も早々と集まりました。

年明けの予定も決めました。1月12日火曜日林宅で午前11時から総会、そのあと新年会を行うことになりました。(T・H)

ファミリーヒストリー

地球に歴史があり、国にも歴史がある様にそれぞれの家族にも歴史がある。そのルーツをNHK がどこまでも探る番組が、ファミリーヒストリーである。

週1回の番組だが何故か熱心に見入って、涙したり拍手をしたり、自分の事のように心配したり不思議な時が流れる。

だれの命にもルーツがあり、何代も前から引き継がれている。良きに付け悪しきに付け苦しい中を頑張った先祖がいる。又面白い様に盛えた時代もあった。これが絡み合った中に自分の命がある事を思うと、感激してしまう。

北海道出身のアイススケーターで金メダリストの清水宏保さんを覚えていられると思う。十数年前になるだろうか。小さい体の清水選手が長野オリンピックで金メダルを獲得した時、真先に応援席にいた母親の首に金メダルを掛けた姿に皆が涙し拍手の渦となった。

今回のファミリーヒストリーは、清水宏保さんの家族についてであった。三代前の曾祖父は茨城県で大農家の優秀な三男坊だった。明治時代の初期、商業学校を出て、カラフトの北海道銀行に就職し、カラフトで網元の女性と結婚し、北海道に帰ってきた。幸せな家族生活だったが、父親が47歳で癌に罹られ、三人の子供を残して亡くなってしまった。

母親は三人の子供を育てる為に来ることは何でもした。その長男が宏保の父親だった。父親は小さい頃に小児麻痺を患い、足に障害が残り思う様に動けなかった。高校を出て自衛隊に入り、散髪屋で知り合った女性と結婚し産まれたのが宏保である。

父親は自分に出来なかった事を宏保に託し、スケートを教え、北海道の寒いリンクの上で、朝に夕に教え続けた。その結果、小学校、中学で優勝し家族で喜んだ。その頃に父親は癌に罹り、限られた命の中でもベッドの中で宏保を見守り励まし応援を続けた。

父親が建設業をしていた事もあり、母親は泥まみれになって働き、宏保を大学へ進ます資金も稼いだ。その苦労は、宏保の目にも忘れられない姿であった。

宏保は大学でも誰よりも努力し力を付け、長野オリンピックで金メダルを獲得した。日本中が喜んだのが昨日の様に思い出される。



ルーツを探る為に、田舎の角々まで調査して分かった祖先について感激した宏保は、自分がこの様に成長するまでに、多くの人々の協力があり歴史がある事が分かり感謝の言葉が涙で述べられなかった。

私も 81 歳になった今、何とか一人暮らしをしているが、81 年の歴史を振り返ると戦中戦後は、今の子供達には想像も出来ない様な苦しい生活だったが、両親は、自分を犠牲にして7人の子供を、それぞれの子に合った技術を身に付けさせ一人で暮せる仕事を身に付けさせてくれた事に感謝している。二代前の祖母は、二人とも学校にも行けなかった明治の初期の時代を生きた人であったことは、知っている。それ以上のルーツは調べようがない。 (Sa・K)



天空のオリオン

この親子に会うのは、何年ぶりだろう。母親は「東京は私の住むところではない」と田・畑を耕して頑張っていたが、高齢になり、現在は介護保険を利用してデイサービスに通っている。そこで作った花を持って来て仏前に供えている。息子は停年を前にして体をこわし教職とは違う職種についている。二年前に知人を通じて出合った鼻笛に凝っている。この鼻笛のルーツは、ブラジルの原住民が天の神と交信するために吹いたと言われているが、はっきりしない。音色はオカリナとケーナと口笛をあわせた様な感じである。木で作られたものや、土で焼いて作られたものがあるが、材質によって音質も少し違ってくる。音程は、鼻から息を出して口からとり入れ、口の中の大きさを変化させて、調節する。どんな曲でも演奏できるが、静かないやし的な曲は、鼻笛の音色が特に合っている。

オカリナ奏者(宗次郎)の曲、天空のオリオンを鼻笛で聞き、今まで耳にしたことのない音色に至福の時を過ごした。彼曰く「今までと全く違った環境に身をおき、音楽をやる事によっていろんな人との出会いがあり、楽しみが広がってきた。それが精神的ないやしになり、人生を豊かにしている」と……………。

今の世の中、こうゆうゆとりの時間を持つ必要があるのかもしれない。

H27.12.8 (S・M)

—琳派・名品との出会い—

あの時持ち帰った思い出のコルク栓。

ほのかに残る赤ワインの香りには、ホテルの夕べに時を忘れて語らい、京の雅に酔いしれた旅の余韻の響きさえ伝わります。

京都・琳派400年 —— 脈々と受け継がれ、時空を超えて今もなお新鮮な輝きを放つ名品との出会いに想いを馳せながら、憧れの古都・京都への一泊二人旅です。

澄みきった空。飛行機雲が音もなく一直線に伸びゆき、海の見えるパーキングエリアの朝の空。悠然と円を描くトビの姿に思わず深呼吸。これからの旅のいい予感です！

京都に向かう高速バス片道5時間は、思ったよりも短く感じられました。

途中高速道事故の為 25分遅れて京都駅八条口に着いたのは 13:25。

ホテルのチェックインをすませて東福寺へ ——

今年は朝夕の温度差がゆるく、紅葉が遅れて、それでも晩秋古都色どり美しく、外国からの観光客も多い都、さすが国際都市です。

小春日和の午後、コートは手に持ち、—— 謡曲に造詣の深いS女史は、《紅葉狩》を謡いながらの散策でした。私も短歌ことばをさがしながら、ゆるやかな時間を楽しみました。

夕食はホテル地下の“京 大和屋”です。

先づは、前菜が出され、盛り付けの美しさ、シバ栗の渋皮煮の美しい四つ切りに感動！白みそ仕立てのお汁に浮く、もみじに見立てた薄切りにんじん。みつばの細茎と柚子のあしらいは淡い自然色美しく食欲をそそります。

生麩・生ゆば・煮魚煮物—どのお料理も器も —— もちろんお味もよろしく。繊細な心配りが伝わり、まさに食の芸術です。

京料理をゆっくり味わいました。

夜はゆっくりホテルの部屋で過しました。

まるやかで芳醇な赤ワインの香りにおしゃべりも一層弾みました。

翌朝です。

いよいよ今日は、本命の京都国立博物館です。

開館と同時に入館はうれしく、音声ガイドの心丈夫な味方もあります。

私の先づの目当ては

《鶴下絵 三十六歌仙和歌巻》です。

書画と料紙との交響・鶴と和歌との二重奏の響きあいにより時間を忘れ、13mを超える金色の世界に、しばし心奪われました。

そして何よりも期待していたのは、

《鶯の細道図屏風》です。

鮮やかな緑青と墨の斬新な画面構成。

書画一体のパノラマ世界に目も心もすっかり奪われてしまいました。

右隻から左隻にそして又右隻にとめぐりゆく無限に続く山道。調和のとれた美しさ。

書画相方の力量のほどを思い、心の余裕さえ感じとれ、書画の渾然一体なる洗練された名品です。私にとりましては、長年憧れ続けている心の宝物です。

《風神雷神図屏風》は

宗達・光琳・抱一の三大名作が一堂に揃う夢のような機会です。

光琳の屏風は、ウラの《夏秋草図屏風》の展示日で、これも又とない機会。堪能致しました。

書物・絵画・工芸品等どのすべての展示室も時空を超えた王朝文化の香り煌めく名品揃に目も心もすっかり奪われてしまいました。

・《鶴下絵三十六歌仙和歌巻》書画と料紙の
交響の鶴と歌との二重奏なり

・清新なパノラマ世界 無限なり

《鶯の細道図屏風》時空を超えて一

・一堂に《風神雷神図屏風》ならぶ

まさに圧巻《琳派 400》

— (京都国立博物館) —

帰りの車中こそ本降りになりましたが、さわやかな天候に恵まれ、私にとりましては生涯の『芸術の秋』の集大成とも云える

京都・琳派 400 年名品との出会いの思い出深い旅となりました。

今日も又

深まりゆく秋いろのくらしの中

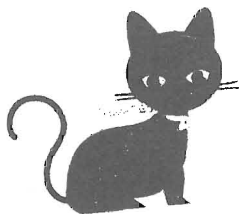
移りゆく自然にときめきながら —————

枯葉舞う小径に 短歌ことばを探しもとめて爽やかな心で生きてゆきましょう。

・雅を求め小春日和の京二人

王朝文化の香りに触れて……………

2015.11.16,17 (T・N)



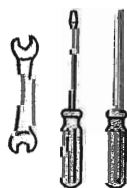
今年の日常生活

飼っていた猫が死んで2年、未だにペットロス症候群が続いている。写真を見る度に、あのしなやかな体とフワフワした毛を思い出す。寒い冬の日、丸まって寝ている猫の真ん中に私が冷たい手を突っ込んだら、そのまま抱えて温めてくれたっけ。昔、私が昼寝をしていたら枕元に仕留めたネズミが置いてあって、さあ、お食べとばかりに猫がのぞき込んでいたこともあった。その時の家中の大騒ぎがこたえたのかネズミ狩りは一回こっきりだったけど、家の外ではセミやスズメ、鳩まで捕まえていた。猫らしい猫だった。私はぴーンと張った猫の白い口ヒゲが好きで、落ちていれば必ず拾って手帳に挟んでおいた。最近は拾ってみたら私の白髪だったりするのでガッカリする。

そんなこともあって、今年は気持ちを外に向けよう、出来るだけ外出しようと心がけた。12月になって、この1年を振り返って楽しかったことを数えてみた。バードウォッチング12回、旅行は3回で9日間、日帰りのお出かけ約60回、映画1回、コンサート4回、ウォーキング30回(後半は膝を痛めて、同じくらい整形外科にも通った)。

通院は省いて合計116日は外出することが出来た。出不精の私にしては上出来だ。

旅行は11月に1人で水族館動物園巡りをした。まず飛行機で名古屋に飛んで、名古屋港水族館に行った。入ってすぐに白イルカの大きな体が目に入る。白イルカもチラッとこちらを見てくれる、目と目が合ってイッキに引きつけられる。白イルカは首が器用に動くので、頷いたりよそ見をしたりと、仕草がとても可愛い。ここでユラユラ泳ぐには丸くて広いヒレが都合良くて、早く泳ぐには尖った細いヒレが良いと教えてもらった。イルカが脳の片方ずつ眠るのも知った。その後 JR で北陸に向かい、石川県のカモ観察館、いしかわ動物園、福井県の越前松島水族館と見てまわった。のとじま水族館にも行く予定だったが時間がかかりそうなので止めた。代わりに加賀市で1日市内観光バスに乗った。丸谷焼や山中温泉、那谷寺といろいろな所をバスが周遊する。どこで降りても1時間すれば次のバスが来る。簡単だと思って何も調べずに乗ったら大変だった。丸谷焼と書かれた停留所で降りたら店舗が一軒あって、古丸谷もあり新作もありで見応えはあったものの何も買わない身としては1時間は長すぎた。伝統工芸全般の展示、体験、販売は他の場所にあった。山中温泉もどんなところか見ておこうと思って降りたら、ここだけはバスの来るのが3時間毎だった。あわててタクシーで移動したので予算オーバーしてしまった。他でもバスの停留所を間違えて置いて行かれたり、路線バスに上手く乗り込んだと思ったら整理券を取ってなくて運転手さんにおこられたりと1人旅はなかなかの苦労があった。でも楽しかった。来年はさあ何をしよう。できればヤンチャオバサンの会を作って昆虫採集や家電製品の分解などしてみたい。(K・K)



京都の文房具屋さん

京都に3年余、何かしっかりした内容のあるものを書いておきたいと、「源氏物語紫式部」を目標（身の丈にすぎる）に。しかし途半ば、思わぬ事が。急遽「文房具屋」に。いつか又必ず式部のことを書きたいと思っている。

京都の街を歩くと、オヤッと気付くことは、文房具屋の店頭に、真紅の「結納」の旗か幟が立っていることである。さる御方がおっしゃっていた。「何か尋きたいことがあると、結納屋に」と。その条り私にも解からぬではない。

しかし、ほとんどの文房具屋が結納屋を兼ねているのは？

京都のことは、その歴史を遡らなければ、謎解きは出来ないものなのである。この一件も、かつて何百年もの昔、文房具屋なんて有ろうか。京とは言えそもそも読み書きすることは、一般の人々には日常的ではなかった。しかししかしである。紙屋は古くよりあった。

少し話は外れるが、菅原道真公の北野天満宮のそばを、天神川が流れている。又の名を紙屋川と言う。多分当社屋で多用に使用され、墨書きされた紙は、多少なりとも反古としてこの川に流されたことも。昔のことである。今では澄み切ったゴミ一つない川であるが、かつては黒ずんでいたと聞く。

紙というものは貴重で、ものを書きおくためだけではない。ものを包み飾るものである。高貴なるものには殊に。冠婚葬祭、すべて格別の上質の紙が使用され、麗々しく文字が認められる。紙屋の主人は、筆にも長じ、人々の御用を丁重に承っていた。そう、京都は何と紙製作・紙商いの多いこと。上質の和紙の製品とその種類・高級感・洗練度はまさに京都である。外国人客の土産は、色紙短冊等これに限る。是非一度はとおすすめしたいのは鳩居堂である。又文化博物館に隣接の紙専門の店。源氏物語の各帳など美しく描いた作品が一面に並ぶ。

時代は変わり、筆からペン、和紙からパルプ紙へと。凄まじいばかりの文具が出廻り、今ではスーパーの棚をびっしり陣取り、かの百均の文具！

幾十年か前には、京都市中に、三百軒の文房具屋があったそうである。今では残るは八十軒くらいに。よそでは買えぬ選りすぐりのもの

を並べ、商品への知識は深い。必ずやお客の要望に応える。

結納について、種々のしきたりについて、無くてはならぬ街のプロフェッショナルとなる。かくして文房具屋の主・店員は、子ども達に限らずお勉強道具のエキスパートとなる。

スーパーで間に合うのもいいが、時に文具の専門店で、思わぬ知識を授かるのも、自分が少し高められた気にもなるのである。いつも通る天神御旅商店街は、確かに文房具屋が多い。その一軒にはショーウインドに何と文具四宝と記し、唐物であろう4点が飾られている。道真公は、京のこの地に活きている。

寒紅梅咲くや北野の筆始 正田雨青

正月には天満宮本殿で書初め大会が。

(M・D)

短歌十首

- 神無月カブトムシさえ四国発ち八雲沸き立つ出雲の社
- この年の名月は大接近す摂理は知らず名月という
- 古代から眺め続けたこの月の動き知らでも「名月」と呼ぶ
- 接近す名月は大星星の動きなどからいよいよ明かし
- 現実に大いなる月接近し赤く怪しく静かに照る
- 病室の窓から眺む今暫し名月明かく天に昇るか
- 医の科学抗癌剤を進歩させ自然に抗う日々を送りて
- まだ鯉に成りたくも無し抗いつ歩き歩いて木製ベンチ
- この蛹ウマノスズクサ食い尽くし揚羽になれて飛ん行けたか
- 小春日の蜜源探しこの時期の越年蝶(てふ)は石薔の花

(A・N)

同級会あれこれ

同級会の席でのこと、隣のK君から「最近、家事以外の事で何をしているの」と声をかけられた。「そうね、この1年間で言えば相変わらず同級会関係のことだった」と。

そういえば、4月松山開催の高校のクラス会、10月今治開催の中学校の同級会でいずれも事務局の仕事で、数か月は重複し忙しくしていた。

先ず、高校のクラス会は、2007年に地元西条市で始まり、その後2年毎に、宇多津町～高松市、福岡県小倉市、広島市、を経て5回目の今回は松山市で開催することになり、愛媛県内に住む女性が幹事を引き受けることになった。

小松高校昭和35年卒業3年3組の住所録をみると47名中、物故者5名、住所不明者3名で39名が健在。新居浜～松山に住んでいる幹事6人が集まり「ふるさと愛媛」の桜の美しい時期にしようとして4月8～9日に道後のホテル椿館本館でと開催日・場所を決める。度々集まるうちに、おもてなしの内容についてもアイデアが次々と出てくる。

趣味の作品を持ち寄り、成果を披露しあおう。早く到着した人のために、お茶席を用意しつろいでいただく。宴会・二次会の余興の工夫を。2日目は砥部焼の絵付け体験を。そして名所・旧跡の多い松山周辺だがやはり松山城にと大綱が決まった。それぞれ関係各所と交渉し会費設定もできた。砥部焼会館や松山市の観光課で観光パンフレットをもらい、みんなの思いの詰まった案内状を5カ月前の10月下旬に発送する。39名に案内し参加者は男性9名女性11名となった。

準備万端整え当日がきた。

受付から始まって二次会会場へ趣味の作品の展示、その傍らでお茶席の準備と、それぞれが役割を果たし舞台が整っていく。

お茶席は母校でお茶の指導をしているYさんが担当。

趣味の作品展は、油絵2点・水墨画2点・かな書1点・臨書2点・革細工のお盆とティッシュペーパー入れ・絵手紙13枚・お手玉10個・パッチワークのベッドカバー・母校が夏の甲子園に出場した時の写真などが展示された。

一息入れた後は宴会に。余興は、毎回披露して下さるM君の詩吟。自作の詩歌を2題吟じてくれる。退職後趣味にと始め、全国大会で賞を得たほどの実力をつけた努力の人。次は西条市・東京で合唱団員として活躍しているT

君とMさんのソプラノ・アルトの即興の合唱（夢一夜；StandAlone(坂の上の雲より）またMさんの指導による合唱や個々の近況報告などで和気藹々、顔もだんだんと赤く染まってくる。

ホテルの出し物、水軍太鼓を堪能した後は二次会。西条市の老人ホームに長年勤め現在民生委員をしているKさんの音頭で大笑いの渦の中、手や頭の体操。突然、ケーキの登場。Y君の74歳の誕生日を覚えていた広島から参加のT君が用意したもの。歓声の中全員でお相伴にあずかる。ホテルからも記念品をいただいたY君は「一生忘れられない誕生日になった」と大感激。

翌日、希望者は道後温泉6時の一番太鼓を待ちかねての入浴。香川県から参加のHさんは「冥途のみやげになった」と更に頬をゆるめていた。

午前中は砥部焼絵付け体験。思い思いの素焼きの器を注文し真剣な面持ちで絵を描く。焼きあがったら後日自宅に届く。世界でただ一つの自分のものができあがった。「自分のパン皿が欲しい」と言っていたHさん。朝食の度に懐かしんでいるだろうか。昼食後、松山城へ。創設者の加藤嘉明のイメージキャラクターの「よしあきくん」が迎えてくれる。海拔132mの平城で松山市街を一望できる。満開の桜とまではいかずともまだまだピンク色の城山を散策。

そして、下山しロープウェイ乗場で解散した。何とか雨にもあわず2日間の日程を無事終えることができた。後は会計報告と写真の後始末。

写真はというと、「この年齢、たくさんの写真はいらぬ」との希望もあり千葉から参加のHさんと私の2人が撮った写真をA4サイズ3枚に纏めた。Hさんから2枚分に収めた写真がメール添付で送られてくる。2人して工夫し出来上がった3枚の合成写真は合計26枚にのぼった。

御礼状・写真・決算報告・余った会費は図書券で郵送することに。封筒を開けた時のみんなの笑顔を想像しながら発送作業を終えた。

去年は母校の小松高校が夏の甲子園に出場したことで母校の絆を強く感じた年だった。加えてキャップテンでピッチャーの日野君は幹事Kさんのお孫さん。特別に熱の入った応援になった。

今回は喜寿のお祝いで集まろうということになったにもかかわらず、待ち切れずその間でも開こうと、千葉のHさんが来年4月東京で開催するよう準備を進めて下さっている。

高校時代殆どの人が大学進学を目指して真面目に勉学に励んでいた。男女間でも親しく話した遊んだ記憶はない。卒業 55 年にしてこの親しみ感。ふるさとを思う心と共に心のよりどころとして大切にしたい。

ホッとする間もなく、次は壬生川中学校の同級会。

昨年 10 月兵庫県加西市での同級会の時、「次回来年は地元開催です」と幹事の挨拶があり全員「パチパチパチ」と拍手。その幹事、席に戻りながら私の肩をぼんとたたいて「シイちゃん頼んだぞ」と。「えー話が早すぎる。事前に何も聞かされていない〜」なんてことは通用せず、今までの経緯もあり、まとも引き受けざるをえなくなってしまう。内心来年は 4 月に高校の同級会を控え大丈夫かなと思いつつも仕方ない何とかしようと決心。そうと決まれば早いもの、幹事になってくれそうな人を選び宴会の最中に耳打ちしておく。二次会の席で時期・場所の希望を聞いておく。

年明けの 2 月初め、西条市から S 君、今治市から T 君、松山市から K さんが小雪の中、東温市に集合し第 1 回目の幹事会を開く。『故郷の良さと瀬戸内の海鮮料理』でおもてなしをと知恵を絞る。今治で船の設計会社の社長をしていた T 君が海上タクシーでクルージングはどうかと提案、宴会場所は瀬戸内の島、馬島を提案、T 君は高校の同級会を「馬島の民宿みはらし」でしたことがあるという。事務関係は K さんと私の二人で分担することにし、10 月中旬開催を目途にし次回までにそれぞれ話を詰めておくことにする。

約 1 か月後、今治で 2 回目の幹事会。2 時間かけて出かける。この日も雨。幹事の S さんが今治駅で迎えてくれる。係留している海上タクシーを見に行く。50 人乗り、瀬戸内の島々の造船所で仕事をする人の足としての役割を果たしているという。このくらいの大きさだと大丈夫と安堵する。次は馬島の「民宿みはらし」へ。馬島はしまなみ海道来島大橋の中間に位置し橋脚が立っている。しまなみ海道の定期バスの停留所があり、歩行者は高速道路からエレベーターで島まで降りる。車は島の人に知らせ高速道路まで来てもらって遮断機を上げてもらわないと降りられない。慣れないこと故、右往左往しながらやっと到着する。そこで宴会・宿泊関係の打ち合わせ。

島を出て、今治市内で同級生の Y さんの経営する「お好みやき屋」で昼食をしながら再度打ち合わせ。楽しみにしている 3 人の同級生も加わる。

3 回目の幹事会は 5 月、昼食を予定している大三島まで下見。そこは条件

が良くないと他の場所に変更する。それまで5人の幹事がメールで何度もやり取りをし、メールをしていない幹事には郵便や電話で確認しあいながら5月中に案内状の発送をと準備にとりかかる。

117名に案内、91名から返信はがきが到着したが最終的には38人の参加となった。10月17日の当日、今治港に集合。「民宿みはらし」のチャーター船に乗り5分で着いたところが宿泊場所の今治市馬島。そこは江戸時代今治藩が馬の放牧を行ったことが島名の由来という世帯数12戸、住民24人の小さな島にある「民宿みはらし」。

大皿から飛び出してきたような豪華海鮮料理(鯛・エビ・さざえ・キノコ等の宝楽焼)(鯛の浜焼き)(鯛をメインに新鮮魚の船盛)(ゆでだこの姿盛)等々が並び目を白黒。お櫃に残った鯛めしをおにぎりにして下さり二次会で頬ばった時の幸せ感。どの顔も満足そうだった。

来島海峡の向こうに沈む夕日や対岸の今治市街・来島海峡大橋の明かりを眺める。二次会で盛り上がった後それぞれの部屋で床に就く。日本3大潮流の一つである来島海峡を行き来する船の汽笛、ぺちゃぺちゃと潮騒の音が心地いい。

翌朝近くの洞窟や灯台まで海岸添いに散策。海から登る朝日がまぶしい。

今治方面へ帰る人と別れ、24名が海上タクシーに乗り待望の瀬戸内海クルージングに出発。風もなく穏やかな真っ青な海。エンジン音も振動もあまり気にならずそしてこの青空にも感謝した。海上タクシーは船長兄弟が交代で操縦。右に左に島々を見ながら橋をくぐる。この広い海の中に強固でこの美しい建造物、大胆な発想力、人間の英知と技術力に改めて驚嘆する。中潮のため高低差は少ないものの渦潮の中へ突入した時のドキドキ感も味わう。

郷土の誇りである「しまなみ海道」が開通してから12年目、近年愛媛県ぐるみでサイクリングに力を入れているが、歴史ある瀬戸内の島々や海上から見る橋の美しさを再確認してみたかった。丁度瀬戸内に君臨した能島来島水軍をテーマとして書いた『村上海賊の娘』和田竜著が本屋大賞を受賞した時でもあり「しまなみ海道」は脚光を浴びている時期でもあった。

クルージングの行程は、馬島8:45発～来島海峡大橋～小島(下船して見学)～来島～能島～伯方・大島大橋～大三島橋～甘崎城址～多田羅大橋～大三島宮浦港(下船して昼食)～大久野島(下船して見学)～今治港16:00着これらの説明は幹事のT君とKさんがしてくださった。

瀬戸内の島々には造船所の多いこと。造船中の超大型タンカーの傍まで行きその桁違いの大きさに度肝を抜かれ、ここでも日本の底力を感じた。

下船し見学した小島は、21世帯33人が住んでいる。明治30年代に芸予要塞がおかれ日露戦争当時ロシア艦隊に備えて作られた砲台跡・弾薬庫・司令塔・発電所跡・兵士の住居跡などが残されている。今は今治市が管理し観光地となっている。

昼食のため下船した大三島の宮浦港。ここは橋が出来るまでは大山祇神社参拝客の玄関口。参道の賑わいはもうない。

また、大久野島は、毒ガス資料館のパンフレットには『日本陸軍の毒ガス工場として、昭和4年に大久野島に設置され、昭和20年終戦後米軍により破壊されました。この工場は各種の毒ガスや信号筒や風船爆弾が製造されましたが、イペリットの生産に重点がおかれていました』と記されている。住民には詳しい内容は知らされず16年間作り続けた化学兵器。一時地図から消された島は今では国民休暇村として開発され、またウサギの島として子ども連れの観光客が訪れている。

16:00 今治港に着いた。「お世話になりました」「楽しかった」「また来年岡山で元気な顔を見せてね」と名残を惜しみながら、各自がバスで、列車で、乗用車で、飛行機で家路を急ぐ。怪我もなく船酔いもなくトラブルもなく何よりも天候に恵まれ、この2日間無事に過ごすことができ全てに感謝した。

翌日からお礼状と決算報告書の作成。全員集合の写真を2枚入れ郵送する。事務局の仕事はこれで完了する。写真係はまだ続く。それぞれが写した写真をDVD又はUSBに取り込み、これをA君に送る。ビデオを撮り続けていたA君はそれと合わせて一枚のDVDに仕上げ希望者に送ってくれる。同級会の度にこの作業をしてくれるA君にはいつものことながら頭が下がる。

私たち学年は太平洋戦争が始まった年に生まれた。見学した小島と大久野島そして瀬戸内の島々が戦時下で果たした役割を思う。

貧しかった時代を経て高度経済成長と共に自由・安心・安全を享受してきた。この間の多くの犠牲があったことを忘れてはいけない。

大久野島はもともと村上水軍の末裔が住み着いていたという。毒ガス障害、死没者の慰霊碑を建て毎年慰霊祭を開催しているという。

また、馬島にしても、17年前の6月10日、島で来島海峡大橋の工事用仮

設桁が落下し、作業員 7 人が死亡、1 人が重傷を負った。事故後住民が費用を出して慰霊碑を建立。毎年命日には献花式を行っているが、日頃住民はいつ遺族が訪れてもいいよう交代で掃除をし、花を添えているという。

同級会が無事終わった数日後、愛媛新聞 2 面を使って『かすみゆく記憶～第十東予丸沈没 70 年』～惨劇生んだ航海に迫る～海員審番所の「決裁書」の検証～の記事が大きく掲載された。「えーこの事実知らなかった」と。あの穏やかな瀬戸内の海で何とこんな悲惨なことが起こっていたのかと愕然とする。

『終戦から 3 か月もたたない 1945 年 11 月 6 日、一隻の旅客船が今治港を目指し午前 7 時 15 分ごろ尾道港を後にした。定員 209 人を大きく上回る 500 人以上の復員兵や一般客らを乗せていた。午前 9 時半ごろ、今治市伯方島の六ツ瀬沖で転覆・沈没し、400 人以上が死亡・行方不明になった』この事実、生活圏内にありながら知らなかったことがショックだった。いままで報道されたことがあったのか、今治市の隣町西条市に住んでいる姉に聞いてみた。当時 14 歳だった姉の最近出版した 3 冊目の自分史にその日の日記が記されているがその事故の記載はない。「あの新聞で知った。そのころの新聞やラジオではその報道はなかった。その後大人の話にも出てこなかった」と。1948 年伯方島に嫁いだもう一人の姉は、夫のいとこの家族が復員船で事故にあったという話は聞いていたというが時期がちがっているようだ。

更に、新聞記事によると、『事故から 70 年を迎えるのを前に現場近くの沖で 70 周年忌慰霊祭があった。遺族や、救助された乗客らの介護に当たった伯方島の島民など約 60 人が犠牲者の霊を慰め、事故の悲惨さを伝えていくことを誓った』とある。

九死に一生を得た人たちは高齢になり、戦後 70 年という節目でもあり、戦争体験者や関係者が当時のことを語りはじめた。今年は体験、記録という形のマスコミ報道や映画もおおかった。悲惨な背景と画面に映る殆どの顔が歪み、苦しかった当時に今を訴えているように思える。

2015 年の今年、2 つの同級会にかかわったことや夏には家族旅行で東北大地震災の被災地石巻を訪れたことはいい体験になった。そして戦後 70 年で観・聞き考えたことは、事実があまりにも大き過ぎ到底消化しきれない。

(S・K)

きっと輝く未来があるから

天地を揺るがす巨大地震が東日本を襲った
工場や民家が崩壊する 人々は逃げ惑う
箱庭のような東北のリアス式海岸には
10メートルに及ぶ高波が次々と押し寄せ
防波堤を破壊して民家や田畑を飲み込み
黒い波頭から伸びる無数の鋭い爪は
2万余名の尊い命を奪った

更に自然は
挑戦好きな人間の英知をあざ笑うかのように
原子力発電所を破壊して放射能を捲き散し
避難所は狼狽した人々がうごめき
瓦礫と化した街は 亡霊が出没するかのように
肉親を捜し求める人々の姿があった

私はフラッシュをあびたように日本の敗戦前後と
中国旧満州の情景が甦ってきた 私は9歳
母は病死 父は出征して兄弟六人が残された
ソ連参戦に続き敗戦を迎えた旧満州は
現地民が「奪われた土地を返せ」と形相を変えて
鍬やつるはし こん棒を振りかざし
津波のように次々と日本人社宅へなだれ込み
金品 家財道具総て略奪された
私は恐怖に戦き 着の身着のまま家を飛び出して
1年3カ月 寒風にさらされながら食料を求め
浮草のように大陸をさまよった
弟 妹 は栄養失調で他界した
ピラミットのように積み上げられた死体を横目に
私は苦しきのあまり亡き母に助けを求めたが
唯々 前を向いて歩く他なかった

4つの遺骨を胸に 引揚げ船で九州博多へ上陸したが
車窓から眺める広島は 原爆投下で灰色の死の世界
黒く焼け残ったドームが戦争の悲惨さを叫んでいた

心身共に疲れ果て 祖父母の待つ愛媛に辿り着いたが
今治 松山も空爆で焼けただけ
県庁のドームが無言で私たちを迎え入れた

あの日から 66年
東日本震災から 100日が過ぎた
私も東北地方をさ迷い歩き
嘆き 悲しみ 共に避難所生活をしたようだ

東北人は自然の脅威に成すすべもなく佇んでいたが
ボランティアの人々や 世界各地から
「がんばろう ニッポン!」と
暖かい激励と援助の手に
人々は肉親や友人の死を受け入れて立ち上がり
子ども達に笑顔が 復興の音が響いてきた

諸刃の剣の原子の核 後世へ負の遺産を遺すなど
大自然からの課題を抱えて 今日陽が昇る

2011年10月

(K・W)

井戸端だより91号に掲載した「夏休みの家族旅行」に
メールや電話で多数の感想が寄せられました。
石巻市を訪れた時の心情に共感を覚えたという友が
「私もこんなものを書いていたの」と上記の詩を送って下さいました。
ある出版社からの依頼で書いていたそうですが、了解を得て下さり
「井戸端だより」にも掲載させていただくことになりました。(S・K)

二度の結婚披露宴

長男が今年3月結婚した。今流行りの「ナシ婚」なのかな、でもそれも寂しいなと思っていたら、親族だけの40人ほどの披露宴を東京で9月にやることにしたと言ってきた。本当にうれしかった。

しかし、親族だけの披露宴？こんなのは経験したことがない。身近な人に聞いてみた。最近では上司や友達も誰をよんだらいいかわからないし、よべばかえって迷惑だと感じる人もいるということなので、この手の披露宴が多いのだという。しかし、親としては、親元から離れた高校卒業後の息子を知っている人たちに会ってその話を聞きたいという思いはあったので、少し残念な気もあった。

息子たちが二人でするので、二人でそれぞれに連絡するだろうと思い、親が出ることもないかとも思ったが、丁度9月の大型連休時だったので、できるだけ早く予定を入れてもらおうと、うちの方の親戚には打診の電話を入れた。甥の一人を除き、兄弟、甥、姪皆出てくれるという。初め東京まではとても行けないと言っていた90歳の私の父も、86歳の母と共に東京まで来てくれることになったので、本当にありがたく思った。

早割75で羽田までの航空券往復を取り、会場のホテルに前日と当日の宿泊を取ってもらった。夫が40年近く前に、今は亡き両親に作ってもらったモーニングのサイズ直しを頼み、私の留袖を探す。留袖は直ぐ見つかったが、確かあったはずの帯が見つからない。実家に連絡して母にないか尋ねるも、あるはずがないと一蹴されてしまった。どんなに箆笥を探してもないので、最終的にちょっと派手な金糸の帯で間に合わせるかと思ったが、自分の今年ではこの帯はあまりには華やかすぎると思い直し、直前に母の留袖と帯を借りようと思い、また連絡する。母も私がどんなに探してもないという言葉をやっと気にしてくれて、一生懸命探してくれたようで、最終的にお目当ての帯が何故かほかの帯の下に一緒に同じ畳紙の中に入っていたところを見つけ出して、送ってくれたので、何とか2日前にホテルに送るのに間に合った。直前までガタガタして肝を冷やしたが、すべて整えて東京に向かい、当日を迎えることができたのでほっとした。

前日の夜はあちらのご両親、当事者の二人、うちの夫婦、それに初顔合わせのうちの下の息子も加わり、ホテルのラウンジで一杯飲みながら楽しく時間を過ごした。

そして迎えた9月19日、私は朝10時から美容室に入り、セット、化粧、そして着付けと進み早々と準備完了。ホテルのロビーに降りていくと、名古屋から集まってくれた親戚がいたので、それぞれにお礼を言ったり、久しぶりに話したりした。皆知り合いなので、緊張することもない。

お互いの親族紹介の後、家族だけの写真を撮る。午後1時半から人前式が始まった。全く宗教色のないところで、二人の宣誓を、参加者全員に承認してもらおうという結婚式だった。全員写真のあと、ホテルのレストランに移動して披露宴が始まった。

まず息子の趣旨説明があった。自分たちの結婚を身近な人々に承認し祝福してもらいたいということなかなか一堂に会することができなくなった親族の親睦の場にしてほしいというようなことを言ったように思う。なるほどと思った。民法725条は親族の範囲を定めているが、6親等内の血族、配偶者、3親等内の姻族とある。今は、二人だけがよければいいというような結婚の意識とそれに伴った形式も多いが、結婚という意味は、法律上3親等内の配偶者の家族とも親族関係になるのである。配偶者の6親等内の血族を観察するのもいい機会になる。意味深い披露宴となった。

親族だけの結婚式で、生まれてから今までの二人がいかに親戚の人々にかわいがられているかということ、幼い頃から密に触れ合い、家族をはじめ皆から深い愛情を注がれて育ってきたことがわかった。それにうちの場合、本当にお世話になった夫の両親は夫のモーニングと共にあると思った。まさに関係性の濃い集まりの意義が感じられた。

久しぶりに会う、結婚した姪や甥と話したり、私の兄弟が夫の兄弟と親しく話したりしている。親兄弟にとってもいい機会をもらうことになった。あちらの親族とも親しくゆっくりお話ができた。友達、同僚、上司の一緒にいる披露宴ならこれは難しかったに違いない。結婚の意味を改めて考えさせてもらえるいい機会になった。

兄弟からは、久しぶりにそれぞれの家族がたっぷり話せたとか、夫の方の姪たちは子育てから一日だけでも解放されたとか聞いた。久しぶりに東京に出てきたので、弟の家族は連休を利用して東京見物をしたらしい。妹夫婦は観劇をセットにしたとか、姪は、車で来て、会場の外で夫が赤ちゃん見てくれていた。大きなおなかを抱えたもう一人の姪は、夫が付き添って来てくれた。皆の協力のもとに参加してくれた親族に祝福されて、本当に幸せなことだと思った。高齢の私の両親も当日会場のホテルに宿泊し、次の日久しぶりに東京の友達に会って、ホテルのレストランでお昼をご一緒し、何と二人で名古屋に帰って行った。それぞれがこの機会を有意義に過ごしてくれたようで、皆からお礼を言われ、うれしかった。

二度目の披露宴(1.5次会)は10月31日、東京銀座の高級レストランで、会社の上司、同僚、後輩、友人に来ていただいたのもだった。初め息子は親が出ることは想定していなかったようだが、親としては高校卒業以来親元を離れている息子の周りの方に会いたい、お話を伺いたいという気持ちがあったので、息子を口説き落とし、結局両方の両親も出るようになった。親は招待ということだったが(もちろんお祝いを出して無理やり受け取ってもらった)、完全会費制で、お祝いはお返しするというスタイルだった。この年になると会費制は何だか失礼なような気がしたが、二人の交友関係の中ではお互い様なのかもしれない。上司には息子がお礼を準備していたし、青森から来てくれた友達には交通費の一部を包んでいて、どちらも渡すのを頼まれた。

この披露宴は、息子の好きなロックの音楽がBGMで、クイズあり、ダンスあり、歌あり、仮装あり、再現ビデオありの本当に初めから終わりまで笑っぱなしの楽しい会だった。確かにこれは親族がいる場では難しい内容なのかもしれない。上司にはちょっと羽目外しすぎ?などと思われるのではないかと心配したが、親としては大いに楽しめたし、息子の上司、同僚、友達と親しく話すいい機会となった。上司には心配で聞いてみた。どの上司も、息子のこの部分をご存じで、披露宴の場ということもあるかもしれないが、ONとOFFの区別がはっきりしていて、仕事も本当によくしていると言われ、ホッとしたのが正直な気持ちだった。70人ほどの人が、会費を払っても来てくださったということはいずれにしろうれしい限りだった。私は皆から息子そっくり

だといわれ、モテモテだった。息子はよく両親の話をしているようで、私の酒豪ぶり？は有名の様だった。

この会では、息子が今あるのはこの方々のお蔭だということがよくわかった。仕事にしろ趣味の世界にしろ親が知らない部分で息子がお役に立てているのだとしたら、集まってくださった皆さんのお蔭だと思う。育てていただいて感謝！感謝！である。

二人はこの後、二次会に参加し、午前様だったとのこと。親たちは近くの由緒あるライオンビアホールで親睦をさらに深めた。

二度の披露宴に出ることで、親から離れていた息子の空白の部分が少し埋められ、親子関係が前より密になったような気がする。息子夫婦が幸せな今後を送ってくれることが、私たちの幸せになる。二度の披露宴は、人生のつながりと広がりを感じさせてくれた。二人には「ありがとう」と心から言いたい。そして体に気を付けて、また彼ら自身のつながりと広がりをつけていってもらいたいと切に願う。

(T・H)



雑 感

今年も終わろうとしています。

綾町での生活も6年目を迎えました。

生まれ育った広島県呉市での17年間、2年間という話で赴任した夫と共に移り住んだ愛媛県重信町(現在の東温市)での16年間、離れたり戻ったりしながらの広島市での8年間に次いで4番目の長さになりました。

広島県は25年間。愛媛県は重信町、今治市、松山市を合わせると24年間。綾町は何年間になるでしょう。

今年は私達の地区にとって、そして我が家にとっても特別な1年間になりました。

世帯数290余の綾町には22の地区が有り、夫々の伝統芸能を5年に一度綾町の総合文化祭で披露します。

今年は私達の地区の披露でした。

四枝(よつえ)城攻おどり。

おどりの由来：400年余り前、天正の頃、島津・伊東二氏が覇を競い、島津は伊東の本拠である綾の龍尾城を攻撃したが、その備え固く、島津は遂に仮装舞踏隊を繰り出し、伊東氏側の気を抜き油断に乗じて攻め落としたという故事の舞踏隊がこの城攻め踊りであると伝えられている。道楽、角廻り、門掛、おどり(長唄端唄)攻寄せの各節で綴られている。(綾郷土誌より)

綾の龍尾城は伊東の本拠でありながら、島津の踊りが今に伝わっているというのも興味深い所です。

夏の終わり、役員さん達は竹の切り出し、踊りに参加してくれる若者探しなどの準備に追われました。綾町外に職を得ている人も多い昨今、参加者探しは大変です。何とか14名の参加者が決まりました。

9月に入ると地区総出で、班ごとに順番に公民館に集まり踊りで背負う矢旗作りです。2m余りの竹ひごを削り、色とりどりの色紙を螺旋状に糊付けしたものを800本以上作ります。役員さんたちは、踊る若者たちに以前の踊りのビデオを見せながらの指導、衣装の点検、補充。踊りの練習が本格的になると婦人会を始め役員さんの奥さんたちは食事の世話に追われます。高齢者の方達は当日に履く草鞋を何十足も編んでくださいました。20本もの矢旗を背負って、町内各所でお披露目して回るので草鞋は擦り切れてしまうと言います。踊る若者たちは矢旗の重さを和らげるため背中や肩に小さな座布団状のクッションをしのばせます。あまり大きいと陣羽織からはみ出して見苦しいので大き

さや当てる場所に苦労するそうです。

11月7日総合文化祭初日。

綾神社への奉納から踊りが始まりました。神社では踊り手さん達だけでなく総ての矢旗にお祓いを受けます。

8日、二日目の午後、総合文化祭会場で、3つの地区の伝統芸能が披露され、夕方地区に戻ってきて、地区の自治公民館で最後の披露です。暑く熱い2日間でした。

その後、各家庭にも矢旗が配られました。今まで、どこに伺っても、日に焼けて色薄くなった矢旗が床の間に飾られているのを見て、羨ましく感じていましたが、我が家にも矢旗がやって来ました。



今年は、地区の女性たちの半数近くが城攻おどりで多忙を極めたため、総合文化祭と同時に開催される農業祭で、22の地区夫々の有機農業実践婦人部による趣向を凝らした料理を振舞う「食の広場」の手伝いに駆り出されることになりました。初めてのことで、邪魔にならないようにするのが精一杯でしたが、前夜からの仕込みと早朝の仕上げで200人分の料理を振舞い終えた時は爽やかな達成感に包まれていました。

その後、地区の自治公民館での手作り文化祭、綾工芸まつりと続き、最後の土曜日の川中神社の秋季大祭で、行事が目白押しだった11月が終わりました。

川中神社の秋季大祭の話は以前から聞いていました。一度行ってみたいと思っていましたが、車は照葉大吊橋より奥にあるキャンプ場まで、その後は小さな吊橋を渡ってひたすら30分程上り坂です。下り坂に自信のない私は、帰り道の事を考えると躊躇していました。今年は、体幹トレーニングを始めて2年。少し、自信が付きましたので、思い切って出かけました。帰りの下り坂も何とか自力で下ることが出来ました。

杉並木では青空を背景にイカルが美しい声で囀っていました。

川中神社を守る有志の方達が集まり、神事の後の直会(なおらい)の振る舞いの準備をしておられました。社務所の囲炉裏で炭火焼する天然の子持ちアユに打つ竹串作りをしている人、豚汁の材料を切る人、ガネと呼ばれる野菜のかき揚げの支度をする人、おむすびのご飯を炊く人、みんな忙しそうですが、その表情には笑顔が溢れていました。そんな中、山の神様に祀る猪の頭が猟友会の方によって運ばれ奉納されました。立派な美形のイノシシでした。寄せ豆腐の準備も始まりました。

周りには人家は有りませんから、様々な所から志ある人達が集まって毎年、秋季大祭と2月の梅まつりを催されます。

川中神社は神仏混交で社殿と阿弥陀堂が並んで建っています。社殿で祝詞が奏上され、阿弥陀堂で般若心経による神楽が執り行われました。阿弥陀堂で般若心経の神楽。何とも不思議な感じがしましたが、緩急自在に舞う姿に幽玄の世界に引き込まれていきました。

その後、いよいよ社務所に移って直会です。社務所いっぱい集まった一人一人に料理が振る舞われます。全てが綾採れの材料で滋味豊かで最高でした。

毎年、これだけの大変なことを続ける活力はどこからくるのでしょうか。

不思議に思う一方、此方に来て5年、これ程では有りませんが、何かにつけて班の皆で集まって、つくりあげていく面倒さと楽しさを味わった私は、ふるまいは受けるより、ふるまう側の方が数倍楽しいことを実感もしています。



こんな日々を送っていると、オリンピックにもノーベル賞にも興味を持ってないでいます。

予算よりはるかに高額だとのことで白紙撤回された国立競技場。しかし、オリンピックの予算自体が6倍にも膨れ上がりそうだとのことです。1兆8000億円。そんなにまでして招致する意味が有るのかどうか、疑問です。格差社会が問題になっている昨今、もう少し有意義な使い道は無いのでしょうか。

オリンピックでの選手、観客の大移動で発生するCO₂はどれほどになるのでしょうか。科学技術の発展、進歩は素晴らしいものだと思いますが、その研究にどれほどのエネルギーが消費されているのでしょうか。

パリでの地球温暖化を食い止めるためのCOP21では、地球が今の姿で存続するには、大きな変革が必要だとされています。先進国だけでなく、新興国にもCO₂排出削減を促しています。それでも、この時期、各地でイルミネーション合戦が続いています。

科学技術も、経済も成長から成熟に向かうべき時のような気がしてなりません。

東日本大震災後、民主党政権下では、30年位後の脱原発を決めていたと記憶しています。現在の安倍内閣での電源構成では原発は20%程度維持とされ、鹿児島島の川内原発は次々に営業運転を再開し、次は伊方原発が再開される見通しです。安全運転に努めるとし、もし仮に事故になった時の対策も考えていると言われていますが、事故が無くても使用済み核廃棄物は蓄積されます。せめて、東京電力・福島第一原発の廃炉が出来、使用済み核廃棄物の処分の方法が確立されてから後、原発再稼働を考えて欲しいものです。福島第一原発の事故に因る除染等が出た汚染ゴミの処分場さえ福島県以外では見つからないのが現状です。

つい先日、明治時代から続く夫婦同姓は違憲だとの訴えが退けられました。

様々な結婚の形態が有って良いと思います。

ただ、報道機関も日常的に“入籍”という言葉が当然のように使うことに違和感を覚えています。そこには、結婚によって新しい戸籍ができるというイメージは無く、名乗る姓の“家”を引き継ぐという感覚が未だに存在するような気がします。それが無くなり、結婚と同時に親の戸籍から除籍され、二人で新しい戸籍を作るのだということが実感されれば、職場で旧姓を仕事名として使うことにも、抵抗が少なくなるように思えてなりません。個としての人格が真に尊重される社会を望みます。

来年も、人との繋がり、鳥や虫たちや植物にワクワクさせて貰えます様に。(K.O.)

お知らせ

・総会のお知らせ

総会は、1月12日(火)午前11時～ 林宅で行います。2015年度会計報告、活動報告、2016年度活動計画など話し合います。

また、総会終了後はささやかな新年会です。多くの方のご参加をお待ちしております。

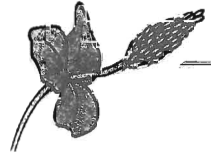
くらしの学習会では、随時会員を募集しています。

活動会員 2000円/年 購読会員 1000円/年

振込先口座番号(郵便局) くらしの学習会 01610-5-21026

問い合わせ先 TEL/FAX 089-964-6956(林)

E-mail: kt-hayashi@nifty.com



編集後記

今年は我が家にとっては(内向きには)とても幸せな1年でしたが、目を外に向けると、国内でも、海外でも不穏な空気が漂っています。この世から一切の戦争がなくなり、世界の平和が日本の平和となり、日本の平和が世界の平和につながるようになったらいいなと思います。

12月16日に出た最高裁判決には失望しました。男女を問わず結婚によって意に反して姓を変えなければならない人がいることが問題で、それを強いる規定はどうかということが問われるべきなのに、焦点がぼけてしまっています。同姓にするかどうかは結婚とは別の問題だと思えます。それによって法律婚を避けるケースがあるのなら、それは本末転倒です。1996年の法制審議会の選択的夫婦別姓の答申、2003、2009年の国連女性差別撤廃委員会の夫婦同姓規定廃止勧告にもかかわらず、何もしてこなかった国会には明らかに怠慢を感じます。だからこそ、今回の最高裁判決に期待していました。今後の国会での早急な対応を望みます。

今年もお世話になりました。来年も何とぞよろしく申し上げます。

皆さまのご健康と多幸を心よりお祈りします。(T・H)

